



Title	The Pearl : その技法について
Author(s)	山田, 美知子
Citation	Osaka Literary Review. 1974, 13, p. 108-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25744
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

The Pearl—その技法について

山 田 美 知 子

I

John Steinbeck は1939年、*The Grapes of Wrath* を出版し、その題材ゆえに大きな反響を呼んで、作品はベストセラーとなり、Steinbeck の作家としての位置は不動のものとなった。その後、親友の Edward Ricketts と共にカリフォルニア湾へ向い、海洋生物の研究、採集をするかたわら、メキシコインディアン達の生活に接した。第二次世界大戦中には、作家として、というよりはジャーナリストとして活動した。加えて、*Red Pony* の映画化に手を染めたり、あるいは American Academy of Arts and Letters の member に推薦されるなど、多忙をきわめていたのであるが、作品としては *The Grapes of Wrath* をしのぐものは出ていない。富める者——大地主達に虫けらの様に及われる貧しい者——Okies の姿をリアルに描き、作者の怒りを、豊かに実るぶどうに託してたたきつけた力は、急速に衰えてしまった。1952年に、*The Grapes of Wrath* をしのぐ大作、*East of Eden* を発表するまでの間で、この *The Pearl* はまさに珠玉の様な作品である。それは、社会的関心という点では *The Grapes of Wrath* に及ぶべくもないが、底には、生命の尊さと愛の尊さが脈々として波うっている。

Steinbeck は Ed Ricketts とのカリフォルニア湾への旅で、*The Pearl* の題材を得ている。1人のメキシコインディアンの少年が、偶然にも信じられないほど大きな真珠を海底から見つける。これさえあれば好きなだけ酒が飲める、と意気揚々と町へ真珠を売りに出かけるが、腹を合せた真珠

商人達は馬鹿安値しかつけない。怒った少年は真珠を持ち帰るが、その夜、真珠を奪おうとする何者かに襲われる。翌日、少年は隠しておいた真珠を取り出し、力一杯海へ投げて、高らかな笑い声をあげる。⁽¹⁾

この原型を作者は大きく変え、愛の尊さ、人間の価値を問う作品をつくりあげた。

Preface でこの作品について、作者は次の様に述べている。

...as with all retold tales that are in people's hearts, there are only good and bad things and black and white things and good and evil things and no in-between anywhere.⁽²⁾

物語では、貧しい素朴なメキシコインディアン達と、彼等の間に交される純粹な愛が good things であり、彼等を支配している白人達——医者、司祭、真珠商人達——のどん欲さが bad things であり、この両者が対比される。漁師 Kino が偶然に『世界の真珠』を発見した事で、物質的な欲望に目ざめる。この真珠は、Kino にとっては、海にしばりつけられた貧しい漁師の生活からの自由を意味する。様々な障害を越えてその欲望を充そうとするが、最後に最愛の1人息子 Coyotito の死によって何が pearl であったかを悟る。

テーマだけを取り出してみると、あまりにも単純で図式的になりすぎたきらいはあるが Steinbeck は彼の得意とする自然描写、様々な象徴的表現を用いる事によって、美しい作品を作りあげている。

以下、テーマを支える手法について、考えてゆきたい。

II

Steinbeck がこの物語に与えた時刻は、ほとんどの場合、夜明け、夕暮、夜であり、それによってつかみどころのない、幻想的な雰囲気をつくり出している。

Although the morning was young, the hazy mirage was up. The uncertain air that magnified some things and blotted out others hung over the whole Gulf so that all sights were unreal and vision could not be trusted; so that

sea and land had the sharp clarities and the vagueness of a dream....Part of the far shore disappeared into a shimmer that looked like water. There was no certainty in seeing, no proof that what you saw was there or was not there.⁽³⁾

そして作者は主人公達を取り巻く自然を、時には美しく、時には大きく立ちちはだかり、行く手をさえぎるものとして描き、そこに主人公達の心理を反映させている。

第一章には次の様な表現がある。

The dawn came quickly now, a wash, a glow, a lightness, and then an explosion of fire as the sun arose out of the Gulf. Kino looked down to cover his eyes from the glare.⁽⁴⁾

Kino の平和な1日が始まろうとしている。愛する息子 Coyotito はまだゆりかごで眠り、妻の Juana は朝食の支度をしている。その物音を聞きながら、Kino は海に目をやっている。海を愛する男にとっては、胸の痛くなる様なまぶしい光景が、短い言葉の中で、力強く表現されている。

メキシコインディアンを動物としか見なしていない白人の医者は、Kino が『世界の真珠』を見つけたと聞いて、手のひらを返した様に、いそいそと往診にやって来る。医者が、Kino 達の無知を利用して恐怖心を抱かせたすぐ後に、次のバラグラフが挿入される。墮落した白人の医者の欲深さをあらわすと同時に、主人公達の持つ恐怖感をいやがうえにも増す表現である。この様な手法は *The Grapes of Wrath* における inter-chapters の手法に通じるものがある。

Out in the estuary a tight woven school of small fishes glittered and broke water to escape a school of great fishes that drove in to eat them. And in the houses the people could hear the swish of the small ones and the bouncing splash of the great ones as the slaughter went on. The dampness arose out of the Gulf and was deposited on bushes and cacti and on little trees in salty drops. And the night mice crept about on the ground and the little night hawks hunted them silently.⁽⁵⁾

いよいよ Kino が真珠を売りに出かける朝は次の様に描写される。

The sun was hot yellow that morning, and it drew the moisture from the estuary and from the Gulf and hung it in shimmering scarves in the air so that the air vibrated and vision was unsubstantial. A vision hung in the air to the north of the city—the vision of a mountain that was over two hundred miles away, and the high slopes of this mountain were swaddled with pines and a great stone peak arose above the timber line.⁽⁶⁾

読者の視線は、空高くそびえる岩の峰にすい寄せられる。作者は、Kino の期待をこの表現の中に託しているのであろう。だが、岩山が vision にすぎないと同様、Kino の夢も、かなえられない運命にあるのだ。

夜、真珠を持つ Kino に、何度も凶漢が襲いかかり、ついに、その 1 人を Kino は殺してしまう。この土地にこれ以上とどまる事の許されない Kino 一家は、逃避の旅へと旅立つ。

The wind screamed over the Gulf and turned the water white and the mangroves plunged like frightened cattle, and a fine sandy dust arose from the land and hung in a stifling cloud over the sea. The wind drove off the clouds and skimmed the sky clean and drifted the sand of the country like snow.⁽⁷⁾

気味悪く叫び声を上げる風と、湾上に重苦しくたれこめる雲の描写は、冒頭の朝、Kino が見る海の描写と何と相違している事か。この描写によって Kino 一家の不安感は、一層、きわ立たせられる。

この様にして、Steinbeck¹は、選びぬかれた言葉をまわりの自然に与え、夕暮の薄暗がり、闇、月夜、夜明け等の幻想的な雰囲気の中で、語らずして、主人公達の心理を浮かび上らせ、あるいは情況を我々の前に生き生きと示してくれるのである。

また Steinbeck は、Kino に様々な「歌」Song を聞かせる事によって、情況を象徴するものとしている。Peter Lisca はこの music motif について *The Pearl* より 2 年前に発表された作品 *The Cannery Row* (1945) の Doc の心情を表わす部分にも見られる、とし ‘This device is not a retreat before the problems of a writer, but an experiment in attempting to render complex and partly subliminal emotions in terms

of an objective correlative,⁽⁸⁾ と評している。*The Pearl* の場合はどうであろうか。

物語の冒頭で……everything they saw or thought or did or heard became a song⁽⁹⁾ と述べられている様に、メキシコインディアンは実際に、昔から歌作りの名人 (great makers of songs) であった事を、Steinbeck は Ricketts とのカリフォルニア湾への旅で取材したのであろう。この素朴な歌は随所に作品に散りばめられて、Kino の心の動き、Kino が予感するものがあらわされている。

冒頭、満ち足りた朝に聞えてくるのは「家族の歌」the Song of the Family である。この歌は Kino 一家が幸福である時には優しさに満ちているが、その幸せが破壊されようとすると、悲し気な調子を帯び、また、勇気をもって行動に移さねばならない時には、厳しゅくに響く。だが、この「家族の歌」に「悪の歌」the Song of Evil が入り込んで来る。無心に遊ぶ Coynito にサソリがその毒の針を立てた時、「悪の歌」が聞こえてくる。Kino は、このサソリを憎しみを込めて粉々に碎くが、その心の中では「敵の歌」the Song of the Enemy がうたわれる。Kino にとって、一家の幸せ、平和をこわすものは全て敵なのである。この平和な一家に次々と訪れる不幸を不吉に暗示するかの様に「家族の歌」に代って「悪の歌」「敵の歌」が次々とうたわれる。この悪を追い払うために Kino は真珠を求めて海へ出る。その時には「真珠の歌」the song of the Pearl が聞こえる。海にもぐった時の大きな期待感と、必ず真珠は見つかる、という暗示の様なものが、Kino の心の中で「歌」となって広がり、美しい海底の描写と見事にとけあっている。

And as he filled his basket the song was in Kino., and the bear of the song was his pounding heart as it ate the oxygen from his held breath, and the melody of the song was the grey-green water and the little scuttling animals and the clouds of fish that flitted by and were gone. But in the song there was a secret little inner song, hardly perceptible, but always there, sweet and secret and clinging, almost hiding in the counter-melody and this was the Song of the Pearl That Might Be, for every shell thrown in the basket might

contain a pearl.⁽¹⁰⁾

『世界の真珠』が発見されると、かすかな音から、次第に高らかな鳴り響く「真珠の歌」と共に、Kino 自身の中にも大きな欲望が広がってゆく。白人の医者や司祭、真珠商人達のものであった欲望は、Kino の上にものしかかってくる。教会で結婚式をあげ、服を新調し、Coyotito の教育を通じて、白人達の支配から自由になる——この Kino の夢は、白人達の欲望に比べると、何とささやかなものであったろう。だが ‘it is said that humans are never satisfied, that you give them one thing and they want something more.’⁽¹¹⁾ という人間の持つ ‘one of the greatest talents’ により、Kino は人間を自然よりも優位に立たせたライフル銃をも欲する。この Kino の欲望は「悪の歌」となって、次の様な Juana の言葉と交錯しながら高められてゆく。

“This thing is evil.... This pearl is like a sin! It will destroy us.... Throw it away, Kino. Let us bury it and forget the place. Let us throw it back into the sea. It has brought evil. Kino, my husband, it will destroy us.”⁽¹²⁾

Coyotito の病いを治したい、というささやかな望みをかなえるはずであった「真珠の歌」は、次第に「悪の歌」と溶け合い、Kino を追いつめてゆく。

そして Coyotito の死によって、自らの欲望が幻想にすぎず、眞の真珠とは ‘Coyotito に具現化された愛と生命の尊さである、’ という事に Kino は目覚める。Coyotito の亡骸を肩に負って町へ帰って来た Kino の耳に、再び「家族の歌」が聞えてくるが、それは ‘fierce as a cry’ となって Kino を責め、また同時に茫漠とした彼の心中をも象徴しているのである。

以上の様に、様々なメロディが奏でられる Songs は、Kino の心の中で、ある時にはかすかに、ある時には激しく、そして入り乱れながら響く。作者は Kino がいだく、あるいは予感する期待感、愛情、憎しみ、怒り、恐怖をこの Songs によって表現しようとしている。

III

さらに、この作品で用いられている技法において、特筆すべき事は、その簡素化された会話表現である。いや、登場人物は、沈黙を通して心を通わせる事もある。

物語の大部分は Kino と Juana の足どりを追うが、この 2 人は、多くを語らない、語る必要がない。

They had spoked once, but there is not need for speech if it is only a habit anyway. Kino sighed with satisfaction—— and that was conversation.⁽¹³⁾

また、太陽が照りつける岩山を、一家が必死で逃げる部分では、お互いに相手を思いやる心が一言の会話も交えずに描かれている。

She looked up at Kino when he came back; she saw him examine her ankles, cut and scratched from the stones and brush, and she covered them quickly with her skirt. Then she handed the bottle to him, but he shook his head. Her eyes were bright in her tired face. Kino moistened his cracked lips with his tongue.⁽¹⁴⁾

そして最後の場面では、次の様に描かれている。

Kino's hand shook a little, and he turned slowly to Juana and held the pearl out to her. She stood beside him, still holding her dead bundle over her shoulder. She looked at the pearl in his hand for a moment and then she looked into Kino's eyes and said softly: "No, you."⁽¹⁵⁾

And Kino drew back his arm and flung the pearl with all his might.

2 人の間には、言葉にはならないが、様々な事が語られている。Kino が震える手で Juana に真珠をさし出す。完全な丸味を持ち、Kino の夢をその美しい表面に写し出していた真珠は、今はもう灰色に醜く見え、その奏でる Song はゆがめられたもの狂気じみたものになりはてていた。Kino はその真珠を Juana に差し出す事によって、Juana の「この 真珠には悪が宿る」という言葉が正しかった事を認め、真珠を捨てようとした彼女を

激しく責めた事を詫びている。だが差し出された真珠を拒む事によって Juana は夫を許し、再び一家の長としての dignity を与え、それに従う事を示している。

Steinbeck は、わずかな身振りや視線の方向、あるいは、まわりの自然に描写を託す事によって 2 人の心を交わせている。

IV

以上、述べてきた様に、Steinbeck は「愛と生命の尊さ」というテーマを、生き生きとした自然描写、そこにもられた登場人物の心象、そして、極度に圧縮された会話表現、美しく、また、不気味に散りばめられた Songs などの手法によって表現し、非常に詩的な作品としている。

(注)

- (1) Steinbeck, John *Sea of Cortez* (The Viking Press, New York 1941), pp. 102—103.
- (2) Steinbeck *The Pearl* (Heinemann, London 1947) preface.
- (3) *Ibid.*, pp.14—15.
- (4) *Ibid.*, p.3.
- (5) *Ibid.*, p.35.
- (6) *Ibid.*, pp.44—45.
- (7) *Ibid.*, p.71.
- (8) Lisca, Peter *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1958) p.228.
- (9) *Ibid.*, p.1.
- (10) *Ibid.*, pp.18—19.
- (11) *Ibid.*, p.26.
- (12) *Ibid.*, p.60.
- (13) *Ibid.*, p.4.
- (14) *Ibid.*, p.83.
- (15) *Ibid.*, p.97.